

糖尿病

Diabetes Mellitus

「動物にも糖尿病？」よく聞かれることですが、もちろん犬や猫、ハムスター、稀ですがフェレットにも糖尿病はあります。

動物が生きていくためにはエネルギーが必要になりますね！犬や猫を含めた我々ほ乳類はエネルギーの一つとしてブドウ糖を利用して、通常血液中のブドウ糖はいつもほぼ一定に保たれています。この役割をしているのが膵臓から分泌されるインシュリンというホルモンで、血液中のブドウ糖を多すぎないように抑えるはたらきをしています。このホルモンが不足すると血液の中のブドウ糖をうまくコントロールすることができなくなり、余分な糖分は尿の中へ排出されます。ですから糖尿病と呼ばれるのです。

膵臓の異常以外にも、腎臓の異常によっても糖尿病は起こることがあります。

原因

遺伝的要因も示唆されていますが、糖尿病は食餌や運動などの環境要因が大きく影響しているものと考えられています。また、膵臓への負担や炎症、腫瘍、アミロイドと呼ばれる物質の沈着などもその要因になります。肥満や発情も糖尿病を誘発する一つのファクターです。

症状

飼育者の方が日頃の生活で一番気付きやすいのは、よく水を飲む(多渴)、オシッコの回数や量が異常に多い(多尿)、肥満あるいは最近急に痩せてきたなどの症状だと思われます。他には白内障が現れる、膀胱炎が頻繁に起こる、おもらし(夜尿)などもあり、末期になると食欲がなくなる、昏睡なども見られます。

診断法

まずは絶食時の血液検査により血糖値を、尿検査により尿糖を検査します。特に猫は興奮によって血糖値が一時的に急激な上昇を示すことがありますので、何度かの検査が必要になるかもしれません。また、検査所に依頼して、フルクトサミン、糖化ヘモグロビンというものを合わせて調べることは有用です。

その他一般的な身体検査や血液検査、白内障などがある場合には眼の検査も必要となるでしょう。

治療法

糖尿病はその病態などから、ストレス性糖尿病、インシュリン非依存性糖尿病、インシュリン依存性糖尿病に別けられます。このうち最も問題となるのはインシュリン依存性糖尿病で、通常、治療というよりはコントロールする病気となります。そうなりますと、人間と同じようにインシュリン依存性の糖尿病の場合は、決められた量のインシュリンを毎日注射することで、コントロールします。動物は人間と違い、自分で注射するわけにはいけないの

で、飼い主の方が毎日行います。それと共に、食餌管理を徹底して行うことも必要です。

また、治療、コントロールと共に、定期的な検査を行いインシュリン量や治療方針の再評価を行います。

自宅での看護法

処方された薬剤はきちんと用いましょう。注射の方法や回数などもきちんと主治医の先生の説明をうけ、正しく行うことが必要です。また、食餌は処方食が無難でしょうが、ご家庭でホームメイドされる場合には高繊維のものが膵臓への負担を軽減してくれます。さらに1度の食餌の量を少なくして頻回与えることもコントロールに役立つでしょう。

できれば、ご家庭で尿糖を測定できる試薬などを用いて、毎朝測定して記録することはコントロールのよい指標になるでしょう。

変化がみられたら主治医の先生に必ずコンタクトすることを心掛けてください。特にインスリン治療を行っている時には逆に低血糖となり痙攣発作などが起こることがあります。

予防法

飼育者の生活習慣が飼育動物を糖尿病に導いている可能性が多くみられます。日頃から、きちんとしたメーカーのフードを適切な量給与することと適度な運動はその予防になるでしょう。特に肥満である場合は適切な管理を行わなければなりません。また、雌犬の場合は避妊手術を行うことでその発症率を低下させることができるとの報告がありますので、繁殖の予定がなければ手術を行うほうがいいでしょう。定期的な血液検査などは早期発見に役立ちます。

メモ

犬では、5歳以上の雌犬に多く、また、プードル、ゴールデン・レトリバー、ラブラドル・レトリバー、シェパード、ドーベルマン、オールド・イングリッシュ・シープドックなどが統計的に糖尿病の発症しやすい犬種として知られています。ハムスターでは高齢になるとよく発症すると言われていて、チャイニーズハムスターやジャンガリアンなどの中には遺伝が示唆されるものもいます。




[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..

当院のホームページ上のPDFファイルなら動画や音などがご覧頂けるものもあり、より病気について理解できます。他にも様々なコンテンツや情報を掲載しております。ぜひ下記URLにアクセスしてください